

【書評】

Avner Offer and Gabriel Söderberg, *The Nobel Factor: The Prize in Economics, Social Democracy, and the Market Turn*

Princeton, NJ: Princeton University Press, 2016, xvii + 323 pp.

「ノーベル経済学賞」受賞者の研究内容を紹介する本はいくつかあるが、賞自体の設立の経緯や背景をこれほど詳しく叙述するものはこれまでなかった。イギリス・オックスフォード大学とスウェーデン・ウプサラ大学の経済史研究者2人による共著であり、政治と「ノーベル経済学賞」の影響関係を歴史実証的に考察する本書は、経済学史研究にも示唆深いものとなっている。

12の章からなる本書の冒頭二章と終章は「経済学は科学か」という本質論に関わるが、その題材となるのが中間諸章で示される「ノーベル経済学賞」のストーリーである。スウェーデンでは社会民主主義が強まり、1932年以降の社会民主労働党（社民党）長期政権は福祉国家路線を固めた。だが、中央銀行（リクスバンク）のオスプリンク総裁は対決姿勢を鮮明にする。1968年、リクスバンクは社民党の雇用・住宅政策に従う代わりに「ノーベル経済学賞」を創設し、選考委員会に市場自由主義的な人員を送り込む。その中心、とくに1980-94年に委員長として権勢をふるったのが経済学者リンドベックであった。ストーリーの前半は、政治から「ノーベル経済学賞」への影響についてであり、「ノーベル経済学賞」は社会民主主義を打倒するというリクスバンクの政治的意図によって創設された賞だ、ということである。

「ノーベル経済学賞」は1901年から続く元来のノーベル賞とは別物で、リクスバンク設立300周年記念として創設されたことはこれまでも指摘されてきた。しかし、本書の第3

章やとくに第4章「リクスバンクがノーベル賞を授ける」はそれ以上の諸事実を克明に伝えてくれる。IMFやBISから影響を受けてオスプリンクの態度は変化し(91)、彼の賞創設アイデアの相談相手としてリンドベックが登場する(98)。スウェーデン・アカデミーでは反対があり(99-100)、ノーベル家へはわずか5日前に一家の最高年齢の87歳女性に通知され(100)、議会未承認のまま発表されたのであった(101)。リンドベックについては第8章に詳しい。社会民主主義から市場自由主義へ転向した彼は、40歳未満で非アカデミー会員であったにもかかわらず、第1回選考委員会に入った。1971年にはストックホルム大学国際経済研究所所長をミュルダールから引き継ぎ、「スウェーデン経済学者のトップに位置する」、「ある種のマフィアリーダー、フィクサー」(179)となった。著者たちは第5章「経済学者の政治イデオロギー」において、経済学者に占める市場自由主義者は実は少数派であることを示し、選考委員会はとりわけリンドベックの委員長期間に右に偏向していたと批判する。

対をなす後半のストーリーは、「ノーベル経済学賞」から政治への影響である。そもそも経済学の分析道具としてのモデルは「想像的構築物」(26)であり、意見の収束をもたらすものではないからこそ、賞という権威がいっそう重要になるのだが、本書では、選考委員会が適度に受賞分野を分散させ、受賞者の政治的左右バランスを考慮したことで、権威づくりに成功したと論じる。「ノーベル経

「経済学賞」は「受賞者に権威のオーラをまとわせた」(142) のであり、1970年代から「市場への転向 market-turn」をもたらした。スウェーデンでは1969年に制度が変わって博士学位取得者数が約10倍になるとともに、「科学的」経済学が促進され、従来のニューレフト的行政官に取って代わった(184-185)。1980年代半ばには社民党の内部から市場自由主義的なフェルト蔵相が登場し、金融規制が緩和され、1990年末にバブル崩壊による経済危機が生じた(第9・10章)。世界においても、ワシントンコンセンサスの登場、通貨危機、汚職・腐敗の横行が観察されるようになった(第11章)。

社会民主主義と市場自由主義の対立構図が提示されるなか、著者たちが社会民主主義の支持者であることは明白であり、ストーリーは豊富な情報に基づいて説得的に語られる。終章の末尾において、彼らは「妥当性を取り戻すために、経済学は理性と開かれた精神に支えられた議論、エビデンス、反論という土俵に立たなければならない」(278)と述べるが、エビデンスなき市場自由主義的議論を展開したとして終始厳しく批判されるのがリンドベックである。明記されていないが、「経済学は科学ではない」というのが彼らの結論であろう。

1974年のミュルダールとハイエクの受賞についても、当然ながら取り上げられている。2人の同時受賞は政治的バランスの産物だという憶測を呼んできたが、本書ではそれはほぼ自明視されている。むしろ評者にとって新鮮だったのは、国内のバランスとして3年後のオリーンの受賞があったとの指摘、また研究論文における両者名の被引用数の推移データであった。受賞当時、ミュルダールはハイエクよりもずっと多い被引用数を誇っており、ハイエクに抜かれたのは1990年代であって、2005年では再びハイエクより7つ上位

だという(129)。この分析を含む第6章「興味深い実証」には、歴代受賞者名の受賞前後の被引用数推移とその類型化・諸類型の提示、受賞すべきで受賞しなかった者(J.ロビンソンやガルブレイスなど)についての考察、またスミス、マルクス、マーシャル、ケインズ、フリードマンの被引用数推移——近年スミスが伸びている——も含まれており、経済学界における言説の流行に関心をもつ者ならば一見に値する。

評者は本書の著者たちの政治的スタンスにおよそ賛同できたが、気になったのは、現代における社会民主主義の成功条件に関する考察である。脱工業化やグローバル化を受けて中央集権的賃金交渉は困難になってきた。現在では完全雇用の達成がより難しく、福祉面でも人口構成の変化、ライフスタイルや価値観の多様化、さらに移民問題などが新たな課題を突き付けている。この点、著者たちは少し懐古的で楽観に傾いてはいないだろうか。市場自由主義が多くの難点をもつことは疑いない。しかし、旧来の社会民主主義に戻れば問題がすべて解決されるわけではなく、社会民主主義の側にも刷新が求められているのであり、スウェーデンではそれをすでに実行中だと思われる。

本書のカバー絵はミュルダール夫妻が仕事をしている光景であり、窓外にはノーベル賞受賞式の晩餐会が開かれる市庁舎が見える。ミュルダールは社会民主主義者であって、賞の創設に関わり、自らも受賞した(そして後悔した)のであり、また経済学は自然科学と同じ意味での「科学」ではないと主張していたことから象徴的に選ばれたのだろう。彼らが対面して仕事するのは男女平等・モダニズム・機能的デザインの現れである。写真だけでなく、絵までも存在することを本書で初めて知った。

(藤田菜々子：名古屋市立大学)